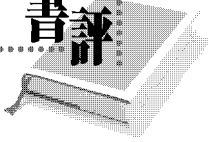


書評

中根 晃 監訳
広沢正孝, 広沢郁子 編著

現代の子どもと強迫性障害

山内俊雄

子どもで強迫性障害がみられることは、さほど稀なことではないし、「固執」「こだわり」「反復」「常同」といった現象まで広く含めれば、強迫類縁の行動は、より一般的にみられる現象といえよう。それでは、子どもでみられるこのような現象は、大人の強迫性障害とどのように違うのか、子どもでみられる固執やこだわりは、強迫性障害に結びつくのか、あるいは、「現代の子どもと」とあえて書名に冠した意図はどこにあるのかなどなどの疑問が、この本を読む前に頭をよぎる。

実は、これらの疑問に、監修者の中根晃の序文が適切に答えている。「現代の日本での子どもの強迫現象は(外国や古い時代の子どものとは)その成立過程で微妙に違っているのではないだろうか」「強迫性障害は自閉症スペクトラムやADHDのような発達障害と違って病態とその症状の中心は成人期の病像である」「したがって、……まず、成人期の強迫性障害を極め、その上で強迫性障害における最近の神経病理学的所見を適正なバランスをもって記述することが重要である」「(その際)診断基準を軸に機能を記述することとなる。(その機能とは)ある時には社会的機能であり、ある時には神経生理学的機能である」

このような視点に立って、児童期や思春期に発症した理由を環境因の面から考察をするが、その際、「発達論」と「別べつの疾患として把握されているが強迫現象が広く出現したり、病態の発展に大きく関与するという視点での(強迫スペクトラム)」の2つの面から発症のメカニズムを考える。

本書はこのような明確な意図のもとに編集・記述された本である。したがって、まず臨床的特徴を発達の視点で明らかにした上で、診断、疫学、心理的成因、生物的背景、生理学と画像診断、心理検査の面から考察している。評者にとって、強迫性障害がどのような機序で起こるのか、できれば子どもで起こるメカニズムをどう考えればよいのか、という点に関心を持って読んだ。多くの精神疾患や精神現象についての機序解明が未だしの感のある中で、強迫性障害の機序解明に過大な期待を寄せるのは無理というものであるが、それでも、これだけのことがわかってきたのか、このような仕組みの可能性があるので、視野が広がる思いをした。たとえば、強迫スペクトラムとして、強迫性と衝動性が同じ軸上にあるかどうかを神経生物学的根拠から考えることができるようになったことなど、今後に期待を抱かせるものである。

このほか、治療と対応の部では、外来面接の仕方、行動療法、薬物療法、親への対応、学校への対応が述べられている。また、児童思春期の強迫の臨床として、広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害、習癖、気分障害、統合失調症、摂食障害、醜形恐怖、心気、離人症など多くの疾患でみられる強迫が記述されているし、「これから育っていく子どもたちのために」という章も設けられており、読み手の発想が広がる思いのする本である。そして何よりもよいのは、どの執筆者も臨床的な視点で、臨床経験に基づいて書いていることである。(埼玉医科大学)

●A5判 234頁 2005 定価4,200円(本体4,000円+税) 岩崎学術出版社